

## B 比爪館跡と周辺の文化

### 北の拠点・比爪館

#### B③ 広がる比爪館の周縁遺跡

比爪館跡に近い南日詰小路口遺跡・大銀遺跡など比爪館中核部の発掘調査から、都市基盤の状況や居館に関する情報が明らかになった。これらの成果から、比爪館の周縁遺跡が東方に広がっていることが明らかになってきた。

平成 19・20 年度に岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した下川原 I・II 遺跡の発掘調査では、縄文時代から近世に至る遺構と遺物が多数確認された。そのなかで注目されるのは、平泉藤原氏と同時代の 12 世紀の堂跡・墓跡、柱穴、溝跡、廃棄場、土器埋納土坑などの遺構やかかわらけ、国産陶器、中国産磁器などの遺物である。この調査によって、平安時代の竪穴住居や土坑、溝なども検出されており、当時の周縁の集落構造やこれまで進展をみていない樋爪氏と平泉藤原氏との支配関係の実態、さらに、12 世紀における葬送儀礼や都市構造など学際的な研究がさらに進展するものと考えられる。

これまで、比爪館跡を定点とする中核遺跡やその周縁遺跡を含む一帯を都市として評価してきた。中世都市は、古代の都城や近世の城下町のように明確な指標が定まっていない。比爪の都市構造を考える場合、往時の都市平泉の全容を示している「寺塔已下注文」が参考になる。平泉は、平泉館を中心に西木戸や泉屋の東に一族の家や宅が存在した。さらに、平泉藤原氏に仕える有力者の居所である高屋が数十棟、数十町に及ぶ倉町、数十の車宿などが建ち並び、街区が形成されていたことが知られる（「吾妻鑑」文治 5 年 9 月 16 日条）。

数十町に及ぶ倉町の存在は、物流のネットワークの結節点機能を考える場合、重要な意味を持ち、ここに部分的ではあるが中世都市平泉の特性が示されている。比爪の場合は、平泉の規模と単純に比較できないが、比爪館を中心に一族・有力者などの居宅、寺社、高屋、倉町などによって構成される同型の都市を志向していた可能性は十分考えられる。

比爪館を基本とする中核地点（市中）には、寺社群や樋爪氏の重臣屋敷群が建ち並び、その外縁には生活・軍備・宗教などに関わる各種工房、市場・宿・町屋が配置されていたと推測される。さらには北上川には河湊を整備し、各所領の物資や北方との交易品が集積された物流の中継地点として、都市平泉の副

次的な機能を果たしていたと考えられるが、推論の域を出ない。しかし、これまでの発掘成果から、大規模な区画溝や直線的な道路遺構が検出されており、都市的な場であることが明らかになりつつある。このような比爪の地方拠点としての都市機能や都市平泉との都市構造の類似性が「第二の平泉」と評される所以である。

今後、比爪館に属する商人・職人、消費や物流に基づく市場の成立、都市機能を支える周縁部や河川交通の存在、寺社に組織される宗教関係者などについて個々具体的な検証の積み重ねによって、北方世界へ通じる奥六郡の北の玄関口として成長、発展した比爪の姿が見えてくる。